

年間第5主日

2011年2月6日

マタイ5:13~16

先週、「心の貧しい人は幸いです」と私たちを励まされたイエスは、今日、私たちに立派な行いをするように呼びかけています。立派な行い、善い行いで「あなた方の光を人々の前に輝かしなさい」と言われています。今日は、立派な行いについて考えます。

私は、カトリックの学校ではなく公立の学校に通っていたのですが、小学生4年生の1学期に、担任の先生がクラスの雰囲気をよくしよう、助け合えるムードにしようと考え「善い行ない比べ」というゲームのようなものを提案しました。最優秀賞を一人が、優秀賞を2人、それぞれに表彰状と賞品がもらえることになりました。私は、そういう賞がもらえると子どもの頃から燃えるタイプだったので、毎月優秀賞を取ろう、できれば最優秀賞を取りたいとわくわくしていました。4月は「お掃除で頑張ったで賞」でした。これまで、あまりまじめにやらなかった掃除をとにかく一生懸命して、先生の前では、特にアピールして（ちょっとずるいですね）最優秀賞をゲットしました。5月は、「人の嫌がることをしたで賞」ということだったので、何をしたらいいのか自分なりに考えて、給食でつかったスプーンの後片づけをみんながしたがらないので、それをやろうと決めました。これなら毎日自然にアピールできると思って続けました。すると、5月も最優秀賞を取りました。けれども、7月まで予定されていた「善い行ない比べは」5月で終わってしまいました。結局、賞を取るためにみんなが競争してクラスの雰囲気はよくならなかったためです。恐らく、張本人は私だったでしょう。賞をもらったら、次の賞を取るために一生懸命になりますが、前の月にしていたよいことはすっかりやめてしまいましたので・・・また、「善い行ない比べる」という名前の付け方にも問題があったかもしれません。「善い行ない」は、もともと人と比較するためにするものではないからです。人が助け合える雰囲気をつくるために、賞をあげるという方法はあまりいい方法ではないことだということを学びました。

今日、イエスは、「わたしたちが立派な行いをするのは、人々が天の父をあがめるようになる

ためである。と言われています。イエスは「立派な行い」を、賞をもらう、自分の名誉のためではなく、「天の父をあがめるため」にいなさいと言われています。「天の父とは、イエスが「アッバ！」と親しみをこめて呼びかける慈しみにあふれた神です。善い行い、立派な行いで、愛にあふれた神様の姿が浮かび上がるためにしてください、と言われています。イエスが自分の命まで捧げてくれたこと。これ以上ない憐れみを示してくれたことを示すことが目的で、立派な行いはそのため手段になります。

人々が神様をあがめるようになるためには、神様の心、いつくしみにあふれる心を感じて豊かにすることが出発点です。目的のための一番大事なことです。それがわかれば、何をするか、どんな立派なことをするかは相対化されます。自分には、人にはできないことがある、と誇ってみたり、逆に、大したこ

とができないと自分を低く見ることもなくなります。神様をあがめる、神様を賛美する心でいることが立派な行いを果たす入り口で、信仰者は、まずそこを大事にすべきでしょう。

私たちが、もっとも身近に神様をあがめ、たたえているのは、このミサに与ることです。普段はあまり意識していないかもしれませんが、ミサのいろいろな箇所、私たちは神様をたたえています。奉納祈願が終わって、叙唱が始まる前に司祭が「心をこめて神を仰ぎ」と唱え、みなさんは「賛美と感謝を捧げましょう」と応えています。神様に「賛美と感謝」することは、既にミサの中で私たちが実践しているものです。この心を生活の中で、職場で、学校や友達の中で広めていきましょう。

普通の日本人は、そういう感覚を持ち合わせていないので、その「感謝と賛美」の心でいることが、すでに、世に光を放っている、既に地の塩になっているということでしょう。

私たちは、何をすることも、どうしても人の目や評価を意識してしまいます。現実社会の中で生きるためにはそれも大切なことですが、評価だけに意識が集まってしまうと「善い行い比べ」のように、結局は、競争心をあおって人助けになりません。何か善いことをするにも、まず「神様への賛美と感謝を捧げる」心で始めましょう。神様が私たちの善意を祝福して、善い実りを結んでくださることに信頼しましょう。賛美と感謝の心で神様のために何か善い行いができる1週間となるようお願いながらこのミサを続けましょう。

イエズス会司祭 柴田潔